

身体部位名詞を伴う再帰構文における格の問題

—ロシア語とフランス語の比較—

水野晶子*・藤村逸子**

Case Marking in Reflexive Construction Accompanied by Body Part Noun: A Contrastive Study of Russian and French

MIZUNO Akiko*, FUJIMURA Itsuko**

Abstract

This paper discusses the alternation of the reflexive and non-reflexive constructions accompanied by at least one body part NP in Russian and French, in particular those that have three semantic arguments: A (agent) MOVE B (agent's body part) TO C (place or another body part). First, positive differences in the use of reflexive constructions between Russian and French are shown following the corpus-based quantitative study. In Russian, the reflexive is commonly used to describe a prominent motion of A, which is brought about by the movement of the body part B to any place C. In French, however, it is employed for illustrating the movement of B to A's own body part, C. These differences are attributable to the different case marking system adopted in the reflexive constructions of this type in these two languages. In Russian, the reflexive-marker's case is accusative and the argument B's case is instrumental, whereas in French, the former case is dative and the latter case is accusative. Generally, it is solely claimed that the reflexive constructions express with their basic meaning an action by an agent reflected within, which is to say it is an internal motion which never works on others. This paper concretely exemplifies that such a cognitive mechanism of the internal motion also has diversity and therefore needs further detailed investigation.

1. はじめに

近年、類型論や認知言語学の分野における再帰構文の研究の中で、機能拡張の過程が様々な言語において共通して見られることが明らかにされてきている (Haspelmath (1990)、Kemmer (1993, 1994)、柴谷 (1997)、Enger&Hesset (1999)、中村 (1999)、井口 (2001))。確かに再帰構文の使用には言語を越えたかなりの共通性が存

在するようであるが、個別言語間で相違が見られるのもまた事実であり (春木 (1993)、宮本 (1984))、その相違点に関する対照言語学的な研究はまだ十分になされていない。本研究ではその相違点の方に注目し、ロシア語とフランス語の再帰構文の使用における異なる面の一つを明らかにする。

再帰構文は、所謂「再帰」¹から「中相」²、そして「受身」³という機能拡張の道筋を辿

*名古屋大学大学院国際開発研究科博士課程後期

**名古屋大学大学院国際開発研究科助教授

ったと言われている。井口（2001）も指摘するように「再帰」と「中相」は混同されがちであるが、Kemmer（1993, 1994）は出来事における参加者の分化の度合い（= relative distinguishability of participants）によって区別することを提唱している。この分化の程度が弱まる程、中相の域に近づくのである。本研究では参加者を分化したのものとして捉えるのが比較的容易な、動作主が自分の身体に対して行う行為を表す再帰構文を取り扱う。これは、「再帰」からはじまる機能拡張が「中相」に達するあたりに位置するものと考えられる。この構文と、同じく動作主が自分の身体に対して行う行為を叙述しながら再帰マーカ―を用いない構文（以下、非再帰構文と呼ぶ）とを比較し、再帰構文が用いられる条件の相違をロシア語とフランス語を対照させて明らかにする。

ロシア語もフランス語も次の例のように「手を挙げる」には非再帰構文を、「体を洗う」には再帰構文を用いる。

A. 手を挙げる

- (1) поднимать руку
 挙げる 手[Acc]⁴
 (2) lever la main
 挙げる df 手[Acc]

B. 体を洗う

- (3) мыться
 洗う・REF[Acc]⁵
 (4) se laver
 REF[Acc] 洗う

Bの例は「中相」の典型例としてよく取り上げられる例文である。これらA、Bのタイプの例文にのみ着目するのであれば、両言語における非再帰構文と再帰構文の関係、

また両言語の再帰マーカ― -сяとseが構文内で持つ機能はよく似ているように思われる。だが、次の例では相違がある。

C. 手を洗う

- (5) мыть руку
 洗う 手[Acc]
 (6) se laver la main
 REF[Dat] 洗う df 手[Acc]

「手を洗う」は、ロシア語では非再帰構文で表されるのに対し、フランス語では再帰構文が選択される⁶。フランス語では、(4)では「対格」である再帰マーカ―が(6)においては「与格」となり、「手」は対格補語として示される。一方、ロシア語では再帰マーカ―は常に「対格」⁷であり、フランス語と同じ構文的操作は行われぬ。

また、次のような例も存在する。(7)と(9)は非再帰構文、(8)と(10)は再帰構文であるが、表されている動作は対照的である。(7)と(10)は自分の体に対して自分の体を使って行う動作であり、(8)と(9)は他人の体に対して行う動作である。再帰文は、ロシア語では(8)、フランス語では(10)で使われている。ロシア語において再帰マーカ―と身体部位が共起する場合には、補語である身体部位を「対格」ではなく「道具格」にするという操作が加えられる。つまり、例文(8)のように、〈再帰マーカ―(対格) + 身体名詞(道具格)〉が用いられる。一方、フランス語の再帰文(例文(10))では、先に述べたように、〈再帰マーカ―(与格) + 身体名詞(対格)〉が用いられる。

- (7) Катя со всей силой
 カーチャ[Nom] 力一杯

прижимала.....руки к груди.

押し当てる 手[Acc] に 胸

(=カーチャは力一杯、両手を(自分の)胸に当てていた。)

(8) Даша прижалась⁸.....

ダーシャ[Nom] 押し当てる・REF[Acc]

щекой к ее плечу.

頬[Ins] に 彼女の 肩

(=ダーシャは頬を彼女の肩に当てた。)

((7)、(8)ともにレフ=トルスト

イ『苦悩の中を行く』1922)

(9) (...) elle appuie...la tête au

彼女 押し当てる df 頭

creux de son épaule.

彼の肩のくぼみに

(=彼女は頭を彼の肩のくぼみに押し当てる。)(Martin Du Gard, R.,

Devenir, 1909)

(10) (...) il se.....mit...les mains

彼 REF[Dat] 置く df 手

aux hanches.

腰に

(=彼は両手を(自分の)腰に置いた。)(Vautrin, J., *Bloody Mary*,

1979)

以上の例からは、ロシア語とフランス語における再帰マーカーの「格」の違い、及びそれに伴う構文内の他の補語の「格表示」の違いが、両言語の再帰構文が表現する言語外事象を異なるものに行っているという仮説を提案することができる。本研究では(7)から(10)のような「自分の体の一部を～に移動させる」タイプの3項的構文を中心に据え、ロシア語とフランス語の再帰構文の差異を、大規模な電子コーパスの用

例を数量的に分析することによって実証的に明示し、仮説の妥当性を検証する。

II. 研究方法

本研究では、ロシア語、フランス語ともに電子コーパスから身体部位を伴う再帰、非再帰構文の用例を収集し、その用例をもとに分析を行った。今回利用したコーパス、および収集対象とした用例条件は以下の通りである。

1. コーパス

ロシア語、フランス語ともに、1900年以降の文学作品(散文のみ)をコーパスとした。ロシア語はインターネット上から独自に収集して作成した自作のコーパス⁹を用い、フランス語に関してはFrantext¹⁰を利用した。コーパス規模は、ロシア語が約580万語(161作品)¹¹、フランス語が約3630万語(465作品)である。

2. 用例条件

語順の制約が比較的緩やかであるロシア語においては補語である身体部位が動詞に前置するパターン¹²も可能ではある。しかし、今回は身体部位が動詞の直後に後続するパターンのみを対象とした。また、動詞による補語の格支配がフランス語よりも複雑なロシア語においては、以下の(11)、(12)の2つのパターン、つまり補語が対格である場合と道具格である場合とともに非再帰構文として扱った。

(11) поднимать руку (=手を挙げる)

挙げる 手[Acc]

(12) махать рукой (=手を振る)

振る 手[Ins]

フランス語では、定冠詞つきの身体部位名詞が対格補語として動詞の直後に現れるもののみを対象とした。

動作主に関しては、ロシア語、フランス語ともに3人称単数であるものに限定し、後続する身体部位を示す名詞は下記に示すものを対象とした。

対象身体部位 (ロシア語、フランス語)

体：тело, corps 肌：кожа, peau 髪：волос, cheveu 頭蓋¹³：череп, crâne 頭：голова, tête 顔：лицо, visage 眉毛：бровь, sourcil 目：глаз, œil 鼻：нос, nez 耳：ухо, oreille 頬：щека, joue 口：рот, bouche 口髭：ус, moustache 唇：губа, lèvres 歯：зуб, dent 顎鬚：борода, barbe 首：шея, cou 肩：плечо, épaule 腕(肩から指先まで)：рука, bras 手(手首から指先まで)：рука¹⁴, main 拳：кулак, poing 指：палец, doigt 爪：ноготь, ongle 尻：зад, cuisse 足：нога, jambe 膝：колени, genou 足(踝より下の部分)：ступня, pied

尚、手や足など一個人が複数所有するもの、あるいは髪のように複数形で用いることが一般的なものに関しては各語の複数形も検索対象とした。具体的な検索条件は次の通りである。ロシア語の再帰文は、[сяまたはсьで終わる5文字以上の文字列]+[上記の身体部位名詞の道具格形]で検索した。また非再帰に関しては、[3文字以上の文字列]+[上記の身体部位名詞の対格形、および道具格形]を含むセンテンスを検索し、Excelのright関数を用いることにより語尾の形式をもとに動詞の認定作業を手作業で行った。ロシア語で検索の対象としたコーパスには、品詞

情報は付いていない。一方、フランス語の対象コーパスのFrantextには品詞情報が付いているため、[動詞の全活用形]+[le、la、lesのいずれか]+[上記の身体部位名詞]という検索を行い、後は手作業により不要な例を取り除いた。

本稿で扱うのは「Aハ(自分ノ)BヲCニ〜スル」のタイプの構文である。Bの位置に現れる項(以下、B項)とCの位置に現れる項(以下、C項)の定義は以下のとおりである。

意味による定義

B項：動作主が移動させる身体部位。(但し、必ずしも現実的な移動が身体部位に起ったとは言えない微妙な例¹⁵もある。)

C項：動作主が自分の身体部位(=B項)を移動させる場所。

形式による定義

B項：ロシア語：非再帰構文においては、動詞の対格補語(例文(11))、あるいは動詞の道具格の補語(例文(12))。再帰構文においては動詞の道具格の補語。

フランス語：非再帰、再帰構文ともに動詞の対格補語。

C項：ロシア語、フランス語ともに前置詞に導かれた項、または副詞。

III. 3項的構文における、再帰と非再帰の使い分けの条件

ロシア語とフランス語には、「Aハ(自分ノ)BヲCニ〜スル」という近似した意味を表現しながら、再帰・非再帰の構文選択

の条件が全く対照的な例が存在することはすでに例文(7)～(10)で見た。本章では、コーパスから得た用例を観察することによって、ロシア語とフランス語における再帰構文の選択の条件を明らかにしていく。まず、1節において、再帰・非再帰構文の分布を動詞別に観察し、ロシア語とフランス語の再帰構文選択の制約には、動詞の種類による差異があることを明らかにする。続いて2節では、ロシア語における構文選択の条件を、動詞をприжимать(=押し付ける)に限定して詳述する。さらに3節では、フランス語における構文選択の条件を、動詞をpasser(=移す、通す)に限って考察する。4節では、ロシア語とフランス語を比較し、差異を明確にする。最後に5節においては、ロシア語とフランス語の再帰文選択の共通点を提示する。

1. 動詞の種類による制約

1-1. フランス語では再帰構文にならない動詞

ロシア語では再帰構文になり得るが、フランス語では非再帰構文でのみ使用が観察され、再帰構文での使用は不可能と思われる動詞をまとめたのが表1である。この事実は、両言語において再帰構文と結びつく動詞の属性が異なることを示していると考えられる。

表1：フランス語で非再帰の動詞
(●は再帰可能、×は不可能)

| 動詞 | 露 | 仏 |
|--|---|---|
| повертывать、tourner ((顔を) 向きを変える) | ● | × |
| склонять、incliner ((頭を) 傾ける) | ● | × |
| бросать、jeter ((手、視線を) 投げる) | ● | × |
| отвертывать、détourner ((顔、目を) そむける) | ● | × |
| дотягивать、tendre ((手を) 伸ばす) | ● | × |
| придвигать、approcher ((頭、顔を) 近づける) | ● | × |

これらの動詞に共通した特徴は、身体の単純な動きを表すという点である。フランス語では、行為の終点が不明瞭な運動を表す動詞を再帰構文で使用することは制限されていると考えられる。例えば、ロシア語では「ドアに顔を向ける」といった行為はповорачиваться лицом к двериと再帰構文で叙述することが可能であるが、フランス語ではこのような行為を再帰構文で表現することは出来ない。

1-2. ロシア語では再帰構文にならない動詞

続いて、逆にフランス語では再帰構文でも使用され得るが、ロシア語では非再帰構文でのみ使用が観察された動詞を検討する。

表2：ロシア語で非再帰の動詞

| 動詞 | 露 | 仏 |
|----------------------------|---|---|
| класть、mettre ((手を) 置く) | × | ● |

表1に見られる動詞群と表2の動詞の大きな違いは、運動の終点が明確であるのか、曖昧であるのかという点である。この明確な限界点を持つタイプの動詞では、先ほどの

傾向とは反対に、フランス語で再帰構文が用いられ易くなる。例えば、「腰に手を置く」の場合、最終的な結果が「手が腰に置かれた静的な状態」であることは明白である。この場合には *se mettre les mains aux hanches* と再帰構文で表現される。一方、ロシア語では結果状態の明示に重点のおかれた「置く」タイプの動詞は、再帰文での使用が制限される傾向がある。表1に挙げたフランス語の *mettre* に直接対応する *класть* のみならず、ロシア語では次に挙げるような「置く」タイプの動詞はコーパスにおいて、専ら非再帰構文のみで使用されている。*закладывать* (= (～の下・後ろなどへ) 置く)、*подкладывать* (= 下へ置く)、*укладывать* (= 並べて置く)、*подвертывать* (= (折り曲げて (自分の) 体の下に置く)、*устанавливать* (= きちんと置く)。つまり、ロシア語においては、身体の生き生きとした動きに重点が置かれぬ事象は、再帰構文での叙述対象となり難いと言える。

1-3. 再帰・非再帰構文の分布

再帰構文が選択可能な動詞であっても、いつも再帰構文が選ばれるわけではない。つまり、動詞による制約以外に、構文の選択には様々な別の制約が働いている。今回対象としたコーパスにおいて非再帰・再帰ともに使用が観察された3項的動詞と、その非再帰構文と再帰構文での使用の分布は以下に示す通りであった。表の非再は非再帰構文での頻度、再は再帰構文での頻度を表す。

表3-A : 3項的動詞とその使用の分布
(ロシア語) 【V+身体部位[Acc]】

| 動詞 | 非再 | 再 |
|----------------------|----|----|
| повертывать (向きを変える) | 49 | 31 |
| склонять (傾ける) | 48 | 4 |
| прижимать (押し当てる) | 43 | 51 |
| наклонять (傾ける) | 34 | 1 |
| утыкать (向ける、埋める) | 9 | 36 |
| бросать (投げる) | 6 | 1 |
| обращать (向ける) | 6 | 1 |
| перекидывать (投移す) | 6 | 1 |
| уширать (押し当てる) | 2 | 36 |
| прислонять (もたせかける) | 1 | 9 |
| потянуть (のぼし始める) | 1 | 8 |
| отвертывать (そむける) | 1 | 2 |
| дотягивать (伸ばす) | 1 | 2 |
| придвигать (近づける) | 1 | 1 |

※ここでは体のベアをなすとされる不完了体動詞と完了体動詞は便宜上一つの動詞として扱っている。
※*повертывать*には*поворачивать*も含める。
※*отвертывать*には*отворачивать*も含める。

表3-B : 3項的動詞とその使用の分布
(ロシア語) 【V+身体部位[Ins]】

| 動詞 | 非再 | 再 |
|-----------------|-----------------|----|
| стучать (打つ) | 4 ¹⁷ | 8 |
| тыкать (突っこむ) | 3 | 17 |
| путать (もつれさせる) | 2 ¹⁸ | 3 |
| ударять (ぶつける) | 1 | 32 |

【V+身体部位[Acc]】 【V+身体部位[Ins]】

【V (再帰) +[Ins]】 3つのパターンで出現

- *совать* (突っこむ、36 / 1 / 2)
- *кидать* (投げつける、2 / 8 / 2)
- *тянуть* (引く、伸ばす 1 / 1 / 6)

表4 : 3項的動詞とその使用の分布 (フランス語)

| 動詞 | 非再 | 再 |
|----------------------------|-----|----|
| <i>mettre</i> (置く) | 154 | 18 |
| <i>passer</i> (移す、通す) | 78 | 83 |
| <i>enfoncer</i> (突っこむ) | 18 | 8 |
| <i>plonger</i> (突っこむ) | 18 | 4 |
| <i>appuyer</i> (押し付ける、支える) | 17 | 3 |
| <i>promener</i> (めぐらす) | 4 | 4 |
| <i>tremper</i> (浸す) | 3 | 4 |
| <i>fouir</i> (突っこむ) | 2 | 3 |
| <i>repasser</i> (再び移動させる) | 2 | 1 |
| <i>heurter</i> (ぶつける) | 1 | 1 |
| <i>introduire</i> (挿入する) | 1 | 1 |

以下では、再帰文と非再帰文ともに使用頻度が高く、両パターンでの使用が拮抗した状況にある動詞を選択して、動詞による制約以外の、両言語の再帰構文選択の要因を探っていく。

2. ロシア語の「Aハ(自分の)BヲCニ～スル」構文

ロシア語コーパスにおいて再帰と非再帰の間で最も大きな揺れの見られた動詞は *прижимать* (=押し付ける) であり、その使用の分布は再帰51例、非再帰43例という結果であった。以下、共起する身体部位 (=B項)、および行為の及ぶ場所 (=C項) に置かれる要素の特徴について詳述する。

2-1. 共起する身体部位 (=B項)

прижимать (=押し付ける) と共起する身体部位名詞 (=B項) の再帰、非再帰構文での分布は下記の表5の通りであった。

表5: *прижимать* と共起するB項身体名詞

| 身体部位 | 非再帰 | 再帰 |
|------|-----|----|
| 頭 | 3 | 6 |
| 顔 | 2 | 14 |
| 頬 | 3 | 16 |
| 耳 | 1 | 0 |
| 唇 | 1 | 11 |
| 歯 | 0 | 2 |
| 髭 | 0 | 1 |
| 肩 | 0 | 1 |
| 両手 | 19 | 0 |
| 片手 | 11 | 0 |
| 指 | 3 | 0 |

今回の収集した例文においては、「手」は非再帰構文とのみ共起していた。*прижимать руки к груди* (=両手を胸に押し当てる)、*прижимать руки к сердцу* (=両手を胸に

押し当てる)、*прижимать руки к животу* (=両手をお腹に押し当てる) と言った表現で用いられ、最頻の出現パターンは *прижимать руки к груди* (=両手を胸に押し当てる) であった。一方で「顔」や「頭」という頭部、また「頬」や「唇」といった顔の各部位は再帰構文との強い結びつきが見られた。これらの身体部位の再帰構文での用例は、次のようなものであった。*прижиматься* лицом к ее плечу (=顔を彼女の肩に押し当てる)、*прижиматься* головой к плечу ее (=頭を彼女の肩に押し当てる)、*прижиматься* щекой к его груди (=頬を彼の胸に押し当てる)、*прижиматься* губами к ее волосам (=唇を彼女の髪に押し当てる)。

2-2. 行為の及ぶ場所 (=C項)

次に、*прижимать* (=押し付ける) という行為の及ぶ場所、つまりC項の要素が「自分の身体部位」なのか「自分の身体部位以外」なのかというファクターと再帰構文の使用の関係を検討する。観察された使用の分布は以下の表6の通りであった。

表6: 行為 (*прижимать*) の及ぶ場所 (=C項)

| 行為の及ぶ場所 | | 非再 | 再帰 |
|---------|------------|--------|---------|
| 自分の体 | 身体部位 | 33 | 0 |
| | 衣類 | 1 | 0 |
| 自分の体以外 | 他人の身体部位 | 1 | 28 |
| | 衣類 場所など | 0 7 | 4 16 |

※C項の具体的な明示がないもの
再帰: 3例、非再帰: 1例

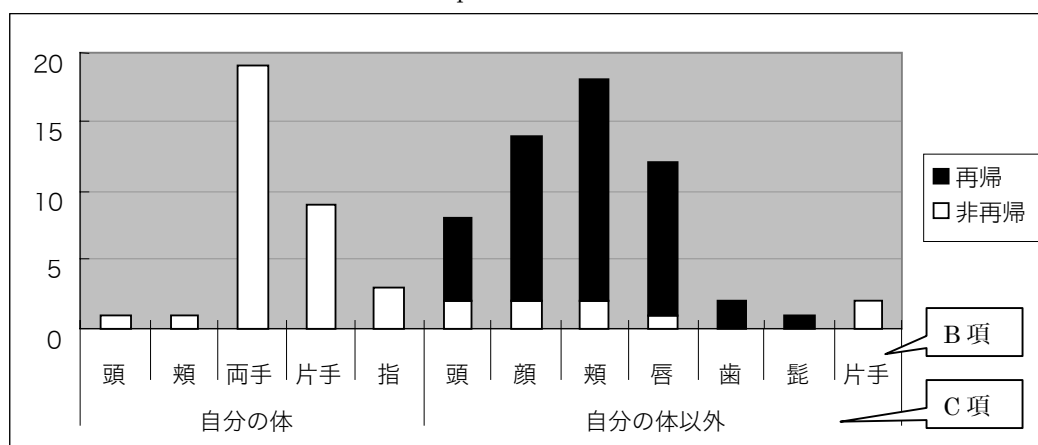
この結果からは、行為の及ぶ対象 (=C項) が自分の身体である場合には非再帰構文が選択され、逆にC項が自分の身体部位以外の場合は再帰構文が選ばれるという明

らかな傾向が見て取れる。例えば、女性がコケティッシュな仕草として自分の肩に頬を押し付ける場合は、*прижимать щеку к плечу* (=頬を肩に押し当てる) と非再帰構文が用いられるが、行為が別の人の身体に及ぶ場合は、*прижиматься щекой к ее плечу* (=頬を彼女の肩に押し当てる) と再帰構文が用いられる。

2-3. 共起する身体部位と行為の及ぶ場所の関係

上記でそれぞれ別々に見てきた「共起する身体部位 (B項)」と「行為の及ぶ場所 (C項)」という2つのファクターをここで融合してみる。

図1 : *прижимать*の振舞い



こうして見ると、*прижимать* (=押し付ける) において、再帰文は「B項=頭部、C項=自分の体以外」と、非再帰文は「B項=手、C項=自分の体」と共起する強い傾向のあることがはっきりと確認できる (用例は、(7)、(8)を参照のこと)。しかしながら、図1が示すように、「頭部を自分以外のものに向ける」という再帰が好まれる環境にあっても、非再帰構文が用いられる場合のあることもまた事実である。これについては次の2-4で触れる。

2-4. ロシア語における構文選択の要因

以上のデータから3項的動詞*прижимать* (=～を押し付ける) の慣習的な言語使用の傾向として次の2つのことが言える。

- ① B項の名詞句に関しては、「手」は非再帰構文と共起し易く、「頭」「顔」「頬」などの頭部の身体部位は再帰構文と共起し易い。
- ② 行為の及ぶ対象 (= C項) が自分の身体の場合は非再帰構文が選択され、自分の身体以外の場合は再帰構文が選択され易い。

ロシア語のこのような身体部位を伴う再帰構文は、再帰構文として詳しく言及されることがあまりないが、Gerritsen (1990: 80

-85) はロシア語の再帰動詞に関する包括的、且つ詳細な研究の中で、この種の再帰構文をPOSSESSIVE REFLEXIVE Vsja と分類し取り扱っている。その中で、本研究で扱う身体部位を伴う非再帰構文と再帰構文の差異については次のように述べている。

...in the corresponding NR(= non-reflexive construction), where the part of the body is depicted as the processed and thereby the Tp(= terminal point) of the action, in the PR(= personal reflexive construction) the part of the body is depicted as merely the means by which the action affects the whole person of the subject-referent, which thereby becomes the processed.(p.81)

再帰文では人間全体、非再帰文では体の部分が描写の対象となるという、この主張に異論はないが、論文中で挙げられている例文¹⁹だけからこの差異を読み取るのは困難であるし、Gerritsen (1990: 80-81) が問題としているのは言語外事象と構文選択の関係ではなく、話し手の視点と構文選択の関係である。本研究では言語外事象と構文選択の関係という観点から分析を進める。

まず、B項で用いられる身体部位の種類によって構文選択の傾向が異なるという点から考えよう。

「手」を何処かへ移動させる動作と、「頭」「顔」「頬」といった頭部を何処かへ移動させる動作とを比べると、一般に後者の方が身体の全体的な動きを要求すると言える。例えば「手を枕の上に載せる」のであれば座ったままの姿勢を保持しながら手だけを移動させることが可能であるが、「頭を載せる」場合はそうはいかない。載せる

部分は「頭」であるのだが、上半身を倒さねばこの行為の遂行は不可能である。また認知的な側面から考えても、「手」や「足」は鏡を使わずとも常に認識できる部分であり、身体部位の中ではコントロールの自由が利く部位である。それに対して頭部は鏡を使わずしては見ることも出来ず、体との一体度が高い部位である。つまり、「手」との共起の高さは動作の部分性を、頭部との共起の高さは動作の全体性を意味していると考えられる。言い換えるならば、ある特定の身体部位を動かすという行為によって動作主が受ける姿勢の変化が部分的なものであるのか、全体的なものであるのかの違いである。Hopper & Thompson (1980) の他動性の研究におけるAffectedness (以下、角田 (1991: 81) に従い「被動作性」と呼ぶ) の概念²⁰を適用すると、動作主自らが受ける被動作性が部分的なものであるのか、全体的なものであるのかの違いであると言える。この部分性と全体性が再帰構文か非再帰構文かを選択する要因となっていることは次の例からもわかる。この例では、非再帰、再帰ともに「手」がB項である。

(13) Суперкарго, не вставая,
貨物上乗人[Nom] 立ち上がらない
тянул руку как-то боком ко мне,
伸ばす手[Acc] に私
что, конечно, можно было принять
за невежество или небрежность.

(=貨物上乗人は立ち上がることなく私に向って何とか横向きに手を伸ばしていたのだが、それは無教養、あるいはぞんざいな態度であると見做されても仕方のないものであった。)

(アレクサンドル＝クプリー
『時代の流転』1929)

- (14) Львов потянулся рукой
リヴォフ[Nom] 伸ばす-REF 手[Ins]
к стоявшему на краю стола
に置いてある 上に 端 机
телефону так, словно хотел
電話
позвонить кому-то, кто сразу все
решит и сделает дальнейший
разговор бессмысленным.

(=リヴォフは机の端っこに置いてある電話に手を伸ばした。そう、まるで誰かに電話をしたかったかのように。すぐに全てを解決し、それ以上の話題を無意味なものにしてくれる誰かに。) (コンスタンチン＝シモノフ『最後の夏』1970)

同じような「手」を伸ばす動作の叙述なのだが、例文(13)の立ち上がることもなく手を私の方に伸ばしたというあまり動作主の状態変化を予測させない文脈では非再帰構文が用いられているのに対して、例文(14)の机の端にある電話に手を伸ばすという上半身の動きまでを予測させる文脈では再帰構文が使用されている。

続いて動作の及ぶ対象(=C項)について検討する。上記の②で述べたように、C項が自分の身体の一部である場合は非再帰構文が選択されることが多い。また、次のような表現は非文とされる。

- (15) *Она прижималась рукой
彼女[Nom] 押し付ける-REF 手[Ins]
к груди.
に 胸

(=彼女は自分の胸に手を当てた。)

しかし実際には行為の種類によっては、C項が自分の身体の一部であっても прижимать (=～を押し付ける) が再帰構文で用いられることがある。日常生活の中ではあまり見られることのない動作ではあるが、次のような動作の叙述は再帰構文によってなされる。

- (16) На счет раз-два-три-четыре
медленно наклониться вниз:
распрямляя ноги, прижаться.
押し付ける-REF
головой к ногам, сохраняя I
頭[Ins] に 脚
позицию ног.

(=一、二、三、四と数えながらゆっくりと体を下へ傾ける。つまり、脚をまっすぐにしながら、頭を脚に押し付ける、ただし脚はIのポーズを保ったままで。) (『舞踊の基礎』(《Азбука хореографии》²¹): 116)

(16)の例文は、床に座りピンと背筋を伸ばしたバレリーナが、床の上に自分の両脚をまっすぐに伸ばしながら、その脚に自分の頭をぐっと押し付ける動作を叙述している。意識して押し付けるのは「頭」であろうが、当然、動きは上半身全体に及ぶ。動作主の「頭」が移動する先(=C項)がたとえ動作主自身の身体の一部であったとしても、動作主の体全体に関わる動作であればこのように再帰が選択されるのである。つまり、動作主の行為の向う先としての他者、あるいは物体の存在は再帰選択の必須条件ではない。一般に、動作主自身の身体の一部に向かうよりは他者へ及ぶ行為の方

が動作主の体全体の動きと結び付き易いが故に、再帰構文は上記で見たような自分の身体外の対象物と共起し易いという結果を生んでいるという解釈が適切であろう。ロシア語においては動作主の状態変化が大きい場合、言い換えるなら、動作主の被動性が全体的である場合に再帰が選択される。よって本章の2-3. で触れた、「顔の部位+自分の身体以外の対象」という再帰構文を予想させる環境にあっても次の(17)のように非再帰構文で表される例も存在する。

(17) Наклонившись к ее теплomu,
приподнятому, рыжеватo розовому
лицу, сумрачный Гумберт
ふさいだ ハンバード[Nom]
прижал... губы к ее
押し付ける 唇[Acc] に 彼女
бьющемуся веку.
震える 臉
(=彼女の熱を持った、上向きに構
えた赤く紅潮した顔に覆いかぶさる
ようにすると、ふさいだ気分のハン
バートは彼女の震える臉に唇を押し
付けた。) (ウラジミール=ナボコフ
『ロリータ』1965)

この例では動作主が臉 (= C 項) に自分の唇 (= B 項) を押し付ける前段階の状態として、既に C 項の所有者の顔と動作主の顔は近付いており、動作主の全体的な動きが「唇」を押し付ける際に要求されないの
で非再帰構文が用いられているのだと考えられる。

3. フランス語の「AハBヲCニ〜スル」 構文

フランス語のコーパスの中で再帰、非再帰の使用に関して最も揺れの見られた動詞はpasser (= 移す、通す) ²²であり、その使用状況の分布は再帰84例、非再帰80例 という結果であった。以下、ロシア語のприжимать (= 押し付ける) の再帰、非再帰環境と比較しながら、passer (= 移す、通す) の使用環境について詳細を見ていく。

3-1. 共起する身体部位 (= B 項)

passer (= 移す、通す) と共起する対格名詞 (= B 項) の非再帰、再帰構文での分布は以下のようであった。

表7: passerと共起するB項身体名詞

| 身体部位 | 非再帰 | 再帰 |
|------|-----|----|
| 頭 | 18 | 2 |
| 目 | 1 | 0 |
| 鼻 | 1 | 0 |
| 腕 | 9 | 0 |
| 片手 | 43 | 68 |
| 両手 | 3 | 10 |
| 指 | 2 | 1 |
| 足 | 1 | 0 |

ロシア語においては「手」は非再帰とのみ共起していたのに対し、フランス語では「手」は寧ろ非再帰よりも再帰と共起し易い。一方、ロシア語において再帰と共起していた「頭部」は、フランス語のpasser (= 移す、通す) の場合、非再帰と共起し易い。

3-2. 行為の及ぶ場所 (= C項)

続いて、passer (= 移す、通す) という行為の及ぶ対象 (= C項) を見る。

表8：行為 (passer) の及ぶ場所

| 行為の及ぶ場所 | | 非再 | 再帰 |
|----------------------------|--------------------------------|----|----|
| 自 分 の 体 | 身体部位 | 0 | 76 |
| | 身体部位 (所有形容詞付) ²³ | 31 | 2 |
| 自 分 の 体 以 外 | 他人の身体部位 | 9 | 0 |
| | 場所など | 34 | 5 |
| | 方向 | 4 | 0 |

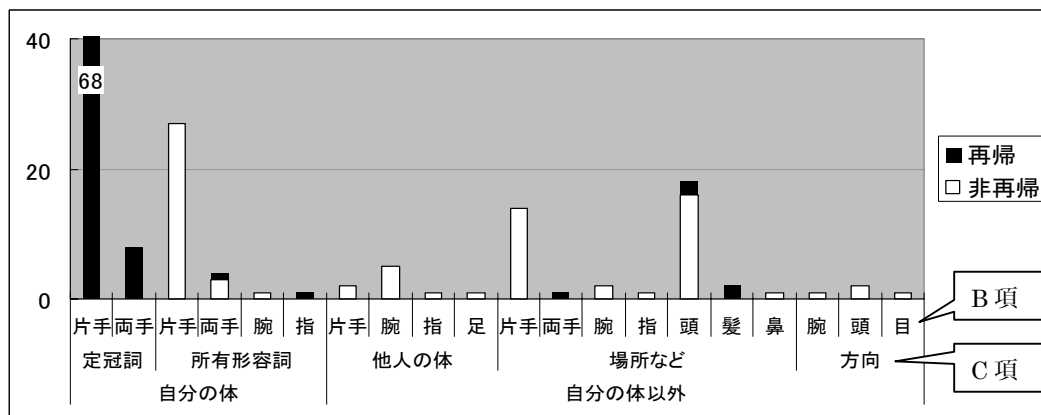
行為の及ぶ対象に関しても、フランス語とロシア語では対照的な結果を見せる。ロシア語においては、動作主の動作の全体性と

関連して、動作の及ぶ対象が自分の身体以外の場合に再帰が用いられる傾向にあったのに対し、フランス語では行為の及ぶ対象が自分の身体である場合²⁴に再帰が用いられる傾向にある。また、自分に行為が及ばない場合には非再帰構文が用いられるという明らかな傾向が見て取れる。

3-3. 共起する身体部位と行為の及ぶ対象の関係

上記で見た2つのファクター、「共起する身体部位 (= B項)」と「行為の及ぶ対象 (= C項)」を融合すると、図2のようになる。

図2：passerの振り分け



この図2からは、動作が「自分の体」に向かい、しかもそれが定冠詞によって限定されている場合にのみ再帰構文が際立って多く選択されることがわかる。

3-4. フランス語における構文選択の要因

以上のデータからフランス語の passer (= 移す、通す) の慣習的な言語使用の傾

向としては、次の2つのことが言える。

- ①再帰、非再帰構文の選択に関して、身体b名詞 (= B項) の種類による有意な差はない。
- ②C項が「自分の体」の場合、それを限定するのが定冠詞であれば必ず再帰構文が選択され、所有形容詞であればほとんどの場合、非再帰構文が選択される。C項が

「自分の体以外」の場合には、ほとんどいつも非再帰構文が選択されるが、いくつか例外もある（これについては5節で触れる）。

言語外事実の観点からは、動作が「自分の体」へ向かうのか「自分の体以外」へ向かうのかがとくに重要である。他に、話し手が事実をどのように捉えているかという発話行為の観点も重要であり、それはC項の限定詞が定冠詞か所有形容詞であるかの問題として観察可能であるが、この問題は本稿の目的とは直接の関係はないので、これ以上は触れない（藤村（1989）を参照のこと）。

フランス語の身体部位を伴った表現において所有者を表す表現としての与格形と所有形容詞の交替については、藤村（1989）で既に詳しく検討した。今回取り上げた再帰表現は与格構文のうちの一つのケース、つまり与格で表される身体の所有者と動作主が一致したケースに当たる。フランス語では、身体部位の所有者が与格で表される時、身体部位は定冠詞によって限定されるのがルールである。われわれの収集した例文は、定冠詞の付された身体部位名詞をB項にもつので、再帰代名詞が現れるための第一条件は満たされている。

その前提の上で、上記の①、②をロシア語と比較しながら再考する。まず、①の傾向から検討して行く。ロシア語のデータ分析において頭部＝動作の全体性、手＝動作の部分性という図式を立てたが、フランス語の再帰構文では、ロシア語の再帰構文の選択要因である「動作の全体性」はその要因としては働かないと考えられる。例文（10）は「手」による部分的な動作である

にも関わらず、再帰文である。一方、次のような例は動作主の動きが大きくなるが、非再帰構文である。

- (18) il s' incline, il se met à genoux, il rampe, il passe...le...bras tout
彼[Nom] 通す df 腕[Acc]
entier à travers la palissade (...)
(=彼は身をかがめると跪いて這いつくばりながら、腕全体を垣根の向こうに通過させる。)(Céline, L-F,
Mort à crédit, 1936)

「手」ではなく、体のより全体的な動きと関わり易い「頭」を例にとってみてもやはり非再帰が選択されている。

- (19) Le chef passe la tête par
df コック[Nom] 通す df 頭[Acc]
une porte entrebâillée et dit
seulement: " oui " .
(=コックは少し開けられたドアから頭を出すと、「はい。」とだけ言った。)(Maurois, A., *La Vie de Disraëli*, 1927)

動作の全体性、部分性という問題は、フランス語において再帰構文が選択されるための要因とはならない。PasserとそのB項の関係は、例（2）の「手を挙げる」の場合と同じである。1-1. で見たようにフランス語では、動作主が身体を使って行く、限界点の不明確な運動を表す場合に、再帰構文が選択されることはない。動作が全体的であろうと、部分的であろうとその条件に変わりはない。

次に、再帰構文が選択されるのは、行為の及ぶ場所（＝C項）が自分の身体であり、しかも定冠詞による限定が行われている場合にほぼ限られるという②の傾向について

検討する。

藤村（1989：76）では「身体部位の所有者を指す与格補語は、その指示対象が、主語で示されている行為者（agent）の行為を受ける被動者（patient）であることを示している」と主張した。これを再帰構文に当てはめて言えば、主語がすなわち、行為者であり、かつ被動者ということになる。再帰においてこの図式がなり立つという点では、フランス語とロシア語とは共通である。先に見た様にロシア語の再帰は、被動作主が被る動きの全体性と結び付いていたが、フランス語においてはロシア語とは別の被動要因が再帰選択に関わっていると考えられる。自分の身体部位が行為の対象（＝C項）になる場合は、所有形容詞を伴ったC項の場合を除いて例外なく再帰構文が選択される。すなわち、フランス語においてはC項が非常に重要な意味を持っていることが分かる。つまり何らかの外部からの力がC項に置かれた身体部位に加えられる場合のみ、動作主は被動作主でもあると認識されて再帰構文が用いられるようになるのである。但し、C項に加わる外部からの力は、図2からも明らかのように「手を（自分の）身体の一部に置いた」というような接触の関係でもよく、強い、あるいは、全体的な被動作性は要求されない。

4. ロシア語とフランス語における再帰の選択要因と動作主の被動作性

以上、ロシア語とフランス語における再帰構文と非再帰構文の選択に関する制約を記述した。

まず動詞の種類による制約について述べると、フランス語では身体をつかった動作

を表す動詞においては再帰構文は使用されず、ロシア語では、完了状態を含意する「置く」のタイプの動詞で再帰構文が用い難い。Vendler（1967）の用語を用いて、前者の動詞を activity 型の動詞、後者を (activity+) achievement 型の動詞と呼ぶならば、ロシア語では (activity+) achievement 型の動詞では再帰文を用いることができず、フランス語では activity 型の動詞で再帰文が用いられないということになる。

次に *прижимать*（＝押し付ける）と *passer*（＝移す、通す）をとり上げて動詞の種類以外の制約を観察した。B項に現れる身体部位の特徴に関する制約とC項によって示される行為の方向性の制約に関しては、次のことが分かった。ロシア語とフランス語の間の大きな違いは、ロシア語では再帰構文の選択がB項の名詞句に依存しているのに対して、フランス語ではC項の名詞句に依存しているということである。ロシア語において再帰構文が用いられるのは、動作主の脳に発し、運動神経の回路を通じて伝達される内部的な力によって、B項に示された身体部位が動き、それと同時に動作主も動く場合である。フランス語では、動作主がなんらかの動作を行った結果、C項に示された身体部位に対して外部的な力が働き、それが知覚神経の回路を通じて身体所有者すなわち、動作主に伝わる。その結果、動作主は被動作主でもあると認定され、再帰構文が使用される。

3番目に、本稿でとり上げた3項的構文に関する限り、ロシア語とフランス語の間には被動作性の大きさに関する制約に違いがある。ロシア語で再帰構文が選択されるためには、B項の身体部位の移動に伴った動

作主の動きの大きさが問題になる。すなわちB項を移動させることがもたらす動作主の被動作性は全体的なものでなければならない。フランス語では、C項への外部からの力は、接触より大きなもの²⁵であればよい。したがって、本稿でとり上げたpasser (=

移す、通す) の場合には、C項が自分の身体でありさえすれば、再帰構文が必ず選択される結果となった(ただし、すでに述べたように身体名詞が所有形容詞によって限定される場合は除く)。

これらをまとめると表9ようになる。

表9 : ロシア語とフランス語の再帰・非再帰構文

| 関与する身体部位 | 力の方向と動詞の型 | 被動性 | 例 | ロシア語 | フランス語 |
|----------|----------------------------------|-----|--------------|--------|--------|
| B項 | 内部 activity | 強 | 頭を(他人に)押し付ける | 再帰(対格) | 非再帰 |
| B項 | 内部 activity | 弱 | 手を(胸に)当てる | 非再帰 | 非再帰 |
| C項 | (内部+) 外部 (activity+) achievement | 強 | のどに(手を)つつこむ | 非再帰 | 再帰(与格) |
| C項 | (内部+) 外部 (activity+) achievement | 弱 | 胸に(手を)置く | 非再帰 | 再帰(与格) |

パターンとしては「関与する身体部位」が「B項」、「力の方向と動詞の型」が「内部+外部, activity+achievement」もあり得るが、このパターンについては5章で述べる。ここで二つの言語の再帰構文の差をあえて誇張して対比させるならば、ロシア語の再帰構文は、B項の身体を使って行う大きな動作を表し、フランス語の再帰構文は、動作主の動作の結果、C項の身体に返って来る結果を表すと言ってもよいであろう。ロシア語とフランス語が再帰マーカーを用いることによって描くこのような差異を、I章で提案した仮説のとおり、両言語における再帰マーカーの「格」の違いに起因していると考えてよいだろうか。宮本(1984: 206, 207)によれば、スペイン語においても「主語の体の方に体の部分を近づけて接触させる」場合には再帰が現れ、その一方で「主語の体を他人の体の方に近づけて接触させ

ている」場合には再帰は現れ難いとしており、フランス語と同じ振り舞いをする。この同等の振り舞いを見せるスペイン語の再帰マーカーはやはり与格である。

しかし、「格」に関しては再帰マーカーの「格」のみならず、身体部位を表す名詞の「格」もあわせて考慮する必要がある。прижимать(=押し付ける)の再帰文では、再帰マーカーが対格、B項の身体部位が道具格である。passer(=移す、通す)の再帰文では、再帰マーカーが与格、B項の身体部位が対格である。両動詞ともC項は前置詞句である。すなわち「動詞+対格(再帰マーカー)+道具格+前置詞句」構文(ロシア語)と、「動詞+与格(再帰マーカー)+対格+前置詞句」構文(フランス語)の対比ということになる。対格はどちらの構文にも存在する。したがって、この二つの構文の差は、フランス語には与格が存在し、

ロシア語には道具格が存在するという点に帰着する。与格と道具格とを比べると、与格は、主格からの独立性の高い強い格である。与格は、言語によっては主語に似た役割を果すことも多い。一方、道具格は一般に、従属的な格形である。つまり与格一つ分、フランス語は複雑な事象を表しているということになる。その差が、与格再帰文では「動作+結果」を表し、対格再帰文では「動作のみ」を表すという違いを生み出すと考えられる。

5. 両言語に共通した特徴：「頭」>「手足」

ロシア語とフランス語の再帰構文が格の表示の違いを反映させる形で異なる言語外事象を描いていることをこれまで明らかにしてきた。最後にここで両言語に共通する特徴について触れておこう。

本章の2節、3節ではприжиматьとpasserを検討したが、これら以外の動詞も対象に見ていくと両言語には格関係を異にしながらも同じような言語外事象を再帰構文を用いて描いているのではないかと思わせる共通の傾向を見ることができる。それは、フランス語においても、「頭部」に関わる行為の場合には、「手足」に対する場合に比べて、再帰構文が現れやすいという点である。

passerの再帰構文の場合、B項には「手」が多く現れる傾向があり、ロシア語のように「頭部」との共起は再帰の特徴としては観察されなかった。それは、3-2.で見たようにpasserにおいては「自分の体(=C項)への接触」が再帰構文のもっとも重要な要因となるからである。「自分の体」に接触する「もの」のうちでもっとも多く使用されるのが、「自分の手」であろう

ことも想像に難くはない。

しかし、passerのC項が自分の身体以外の場合にも稀ではあるが、再帰構文の選択される場合のあることはすでに述べた。自分の体へと向かう動作ではないにも関わらず、再帰構文が選択される理由は何なのか。そこで、表4に挙げた動詞すべてに関して、自分の体以外へと向かう例のみを取りあげ、B項の身体部位の分布を調べた。これらの例はB項におかれた身体部位の移動に起因して、主体が被動作主でもあると認識される例である。結果は次のとおりである。フランス語でもやはり、ロシア語と同じように「手足」に関わる行為は非再帰で表され易く、「頭部」に関わる行為は再帰で現れ易い傾向が存在することが指摘できる ($\chi^2=22.28$, $df=1$, $p<0.01$)。

表8：共起する身体部位（フランス語）

| 身体部位 | 非再帰 | 再帰 |
|------|-----|----|
| 手足 | 187 | 7 |
| 頭部 | 36 | 13 |

※ 頭部には頭、頭蓋、顔、頬を含む。

たとえばpasserにはこのような例がある。

(20) Julien se.....passa. la.
 ジュリアン[Nom] REF[Dat] 移す df
 tête sous le robinet de la cour et
 頭[Acc]
 but longuement.

(=ジュリアンは頭を中庭の水道の蛇口の下に置き、長い間水を飲んだ。) (Clavel, B., *La Maison des autres*, 1962)

また、enfoncez (=突っこむ)を例にすると、la tête (=頭)がB項の3例のうち、2例は再帰動詞で表され(21、22)、1例が非再帰

である (23)。

(21) il s'enfonça la tête dans l'herbe

REF[Dat]

(=彼は頭を草の中に突っこんだ)

(Crevel R., *La Mort difficile*,

1926)

(22) il s'enfonça la tête là-dessous

REF[Dat]

(=彼は頭をその下に突っこむ)

(Boudard A., *Les enfants de cœur*,

1982)

(23) il enfonce la tête à moitié dans le pot

(=彼は頭をつぼの中に半分突っこんだ)

(Pourrat H., *L'Auberge de la belle bergère*, 1925)

一方、les mains (=両手)、la main (=片手) では、10例すべてが、次のような非再帰文として表現されている。

(24) Le jeune homme enfonce les mains

dans ses poches.

(=若者は両手をポケットに突っ込んだ)

(Duhamel G., *Le jardin des bêtes sauvages*, 1934)

ここに挙げたフランス語の再帰構文の例文 (20)、(21)、(22) は、一見するとロシア語において再帰構文を用いることで叙述される事象と同じに見える。しかしすでに述べたように、フランス語ではB項に置かれた身体の動きは、どれほど大きなものであっても、それ自体で再帰構文の選択要因として働くことはない。ロシア語と同じように、「頭」>「手足」の順で再帰構文が選択されやすい傾向が観察されるとはいえ、フランス語においては、それは「動作の全

体性」にかかわる制約ではなく、「動作の結果の全体性」にかかわる制約であろうと考えられる。例文 (20) が主として描いているのは「頭の移動という動作」そのものではなく、「移動の結果、頭が水道の蛇口の下に置かれている状態」である。「手足」とは異なり、「頭」はその所有者と同一視されやすいという点において、ロシア語とフランス語には共通性がある。「頭がある場所に置かれた状態」は「人間全体の状態」と捉えられやすい。つまり、(20) では「頭の移動」の結果が「人間全体の状態」に影響を及ぼしたと解釈されやすいために再帰構文が選ばれている。同様に (21) と (22) でも、動作の結果、身体の部分だけではなく、人間全体が「草の中」や「その下」に埋もれた状態に至ったと捉えられやすく、そのために再帰構文が用いられていると思われる。一方、(23)、(24) では、「頭半分」や「手」など体の一部にかかわる行為であるため、その所有者全体にかかわる問題であるとは捉えられ難く、再帰構文は選択され難い。

次の (25)、(26) は、上で見た例と同様に、B項に置かれた身体部位における被動のゆえに、ロシア語、フランス語ともに再帰構文が用いられている。また、身体部位が「頭」の場合にとくに再帰構文として表されやすい。ただし、この例ではこれまでの例とは違って、動作主の意図的な行為を表してはいない。このタイプの例は、ロシア語とフランス語において、同じ言語外事象を描いて、同じように、身体部位を伴う再帰構文が用いられる数少ない例である。

壁に頭をぶつける

(25) удариться головой о стену
たたく・REF[Acc] 頭[Ins] に壁

(26) se heurter la tête
REF[Dat] ぶつける df 頭[Acc]
contre le mur
対して df 壁

これらの再帰構文の選択の理由は、以上に挙げた原則から説明が可能である。つまり、(25)と(26)は、同一の理由で用いられているわけではない。ロシア語では「頭を何かにぶつける」行為は、これまでに見てきた「頭」を何かに押し付けたり、「顔」を誰かに向けたりする動作と同様、動作主の全体的な動きに関わると解釈可能であるために再帰構文が選択される。同様にフランス語においても、「頭を何かにぶつける」行為は、これまで述べてきたとおり、動作主が「頭」を動かしたために、外部の力による反発を受け、自分にその結果が戻ってくるという事象を表しているために、再帰構文が選ばれるのだと考えられる。

B項に置かれた身体部位に対する何らかの行為が原因となって再帰構文が使用される本節で見た例文の場合、次のことが言える。ロシア語の対格の再帰マーカーは、道具格の身体部位の動きにつれて、動作主全体に動きが及ぶことを表す。この場合、道具格の身体部位の動きと、動作主全体の動きとの関係は直接的・連続的である。一方フランス語の与格の再帰マーカーは、対格におかれた身体部位の動きのあと、その反動が身体部位に戻り、最終的に動作主にその結果の状態がもたらされたことを表す。この場合、対格の身体部位の動きと、与格の再帰マーカーが表現するその結果状態と

の関係は、認知的意味において、間接的である。つまり、動作と結果状態という2つの異なった出来事が融合して表されていると解釈できる²⁶。しかし、いずれの場合も、身体部位が蒙る被動作性が大きいものであるほど、再帰構文が使用されやすくなることに違いはない²⁷。身体部位が「頭部」である場合には「手足」である場合よりも、被動作性が高いと認識されることも、両言語に共通している。

IV. 結論

本研究では、ロシア語とフランス語の再帰構文を特徴付けることを目的として、大規模コーパスを調査した。

身体部位を伴う3項的構文の言語使用の記述を通して、ロシア語とフランス語の再帰構文には2つのタイプの差異があることを明らかにした。まず1つ目は、再帰構文によって描かれる言語外事象そのものが両言語で異なるというタイプである。これについてはⅢ章の1節から4節で取り上げた。ロシア語では動作の全体性に関わる「B項を他人のC項へ移動させる」という事象が再帰構文で表現されるのに対し、フランス語では「B項を自分のC項へ移動させる」という事象が再帰構文と結び付くという差異である。2つ目のタイプは、表面的には両言語において再帰構文が同じ言語外事象を表しているように見えながらも、言語行為としての、再帰構文の選択の条件には差異があると考えられるものである。Ⅲ章の5節で扱った。「頭を自分以外のC項に移動させる」タイプの例がこれに相当する。これらの点は、両言語において再帰構文内の格表示のシステム、すなわち再帰マーカーと、身体部位

を表す補語の格形が異なるということから説明できる。

われわれは他方、両言語にみられる共通点として、「頭」は「手」よりも、その所有者と同一視されやすく、よって再帰構文が現れやすいという傾向を確認した。これは人間が、自分の身体に対して持つ一般的な認知傾向から説明が可能であると思われる。

一般に再帰構文は動作主に行為が帰し、他者への働きかけのない内的運動を基本的意義とすると特徴付けられるが、本稿ではその内的運動の認知的メカニズムにも多様性があることを具体的に明らかにした。

従来の再帰構文の研究では、再帰マーカ-の有無が関心の中心に据えられ、再帰マーカ-の格やそれに付随する格の差異についてはあまり注意が払われてこなかった。文法化が進んでおり、またその程度に一方は接辞、一方は語という差があるにも関わらず、再帰を表す為の文法的マーカ-として用いられる-сяとseが元来的な格を反映させる形で本稿で明らかにしたような異なる現実世界を描いているという事実は、再帰研究においても「格」の問題は蔑ろにできないことを物語っていると言える。

最後に、I章で触れた構文拡張の観点から本稿で扱った身体部位名詞を伴った3項的な再帰構文の位置付けを試みる。Kemmer (1993、1994)の分化の度合い(=distinguishability)というスケールで両言語の動作主と再帰マーカ-の関係を考えてみよう。フランス語では、C項が動作主の身体である場合には再帰マーカ-が使用される。この場合、動作主としての主体と、再帰マーカ-によって表される被動作主としての主体の間には、B項の名詞を用いて

おこなう動作主の動作が介在している。つまり、動作主と再帰マーカ-の関係は意味の上で間接的である。またC項が動作主の身体でない場合にも、III章5節で見たように、B項との関係から再帰構文が選択されることもある。この場合、再帰マーカ-が表す主体の被動作性は、動作主による身体への直接的・内的な働きかけに基づくのではなく、C項が示す「別のなにか」の存在に基づいて認識される。すなわちこの場合にも、主語と再帰マーカ-の関係は、ある意味で間接的である。一方、ロシア語においては、主体の被動作性は、何かを介在させることのない、動作主による自己の身体に対する直接的な支配に由来している。その力は、そのまま自分自身の全体に帰り、自分を変化させる動きとなる。よって両言語を比較すると、ロシア語の方が、動作主と再帰マーカ-が示す被動作主との分化の度合いが低く、動作主と被動作主は融合していると言える。つまり、ロシア語の身体部位を伴う再帰構文の方がフランス語の再帰構文よりも中相の域により深く入っていると言える。

注

1 「再帰」の典型例：

Поул видит себя в зеркале. (ru.)

Paul se regarde dans la glace. (fr.)

(=ポールは鏡の中の自分の姿を見ている。)

2 「中相」の典型例：

Поул моется. (ru.)

Paul se lave. (fr.)

(=ポールは体を洗っている。)

3 「受身」の典型例：

Русская литература лучше всего читается в

身体部位名詞を伴う再帰構文における格の問題

- мире. (ru.) (=ロシア文学は世界で最もよく読まれている。)
- Le livre de Lyotard se vend très bien. (fr.) (=リオタールの本は非常によく売れている。)
- 4 本論中の提示例文の文法的注釈には、次に示す省略表記を用いる。
- [Nom](=Nominative), [Dat](=Dative)
[Acc](=Accusative), [Ins](=Instrumental),
REF(=Reflexive marker), df(=Definite article)
- 5 本研究では、-сяを分析的に捉え便宜上、[Acc]と文法的格表示を行うが、これは動詞に後置して膠着する接辞であり自立語ではない点において、フランス語のseとは異なる。古代ロシア語において-сяは再帰代名詞として動詞に対して統語的に自由に振舞っていたが、自由統語結合を止め次第に対格形に統一され、現代ロシア語においては動詞に後置して膠着する接辞となっている(石田(1996:314-316), Matthews(1960:211))。
- 6 König, E. & M. Haspelmath(1998)は、この問題に関してロシア語とフランス語を対照させているが、ロシア語の再帰構文にはまったく触れていない。
- 7 ロシア語の再帰マーカーが対格である所以は注5で述べた通りである。但し、ロシア語においても自立語としての再帰代名詞の与格形を伴う表現もある。
- ...вдохнула мать и морщинистой ладонью
母[Nom]
вытерла себе лицо.
拭う 再帰代名詞[Dat] 顔[Acc]
(=母は大きく息をするとしわだらけの手のひらで顔を拭った。)(レオニード=レオノフ『穴熊』1924)
- このような例は一般にロシア語では再帰構文とは扱われず、その使用も[再帰動詞+身体部位]の形式に比べると制限されている。本コーパスによる使用例は72例であった。(全ての人称を含む。語順は[動詞+себе+身体部位名詞]に限る。)
- 8 動詞の末尾が母音で終わっている場合、接辞-сяは-сьとなる。
- 9 Библиотека Максима Мошкова <http://www.lib.ru/> から主に収集。
- 10 詳細は<http://atilf.inalfr.fr/text.htm>、藤村、内田(2003)参照のこと。
- 11 ロシア語コーパスに含まれている文学作品名に關しては、APPENDIX Iを参照のこと。
- 12 На пороге он обернулся и один глаз
彼[Nom] 目[Acc]
закрыл без единой морщинки, а другим
閉じる
посмотрел на меня - мне показалось, что с
подозрительным выражением.
(=入口で彼は振り向くと一方の目を完全に閉じ、もう一方の目で私を見たので、私には不審がっているように思われた。)(ベニアミン=カヴェーリン『開かれた本』1956)
- 13 フランス語においては、「頭をぶつける」という文脈で「頭蓋」という語を用いることがある為、今回、検索の対象とする身体部位名詞として取り上げた。
- 14 フランス語においては「肩から指先まで」と「手首から指先まで」を表現する2つの語彙が存在するが、ロシア語は共にрукаである。
- 15 このような例については注22に挙げてある。
- 16 各動詞の使用のイメージが掴み易いように其々の動詞と結び付き易い身体部位名詞を丸括弧内に挙げて置く。
- 17 非再帰の例は、стукнуть зубами(=歯をカチカチ鳴らす)という例のみであり、3項的ではない。
- 18 非再帰は2例ともпутать ногами(=足を絡ませる)という表現で出現した。フラフラ足を絡ませながら歩く様態の叙述であり、3項的ではない。
- 19 (非再帰) И вдруг, отвернувшись, он
彼[Nom]
прижал.....лицо к подушке и тихо заплакал.
押し当てる 顔[Acc]
(=突然、彼は向きを返ると枕に顔を押し付けて静かに泣き出した。)

(再帰) Юра в одной рубашке
ユーラ[Nom]

подбежал к окну и прижался.....лицом
押し当てて-REF 顔[Ins]
к холодному стеклу.

(=ある上着を着たユーラは窓に駆け寄ると、冷たいガラスに顔を押し付けた。)

20 Hopper&Thompson (1980) は、他動性の研究の中でその度合い計る9つの指標の一つとしてAffectedness of Oという概念を取り入れ、SがOに全体的にaffectするのか部分的にaffectするのかが他動性の高低の決定に関わるとしている。

21 Барышникова, Т. 2000. *Азбука хореографии*. Москва, Айрис Пресс

22 passerは多様な意味を有する動詞である。次のように普通は3項的とは解釈されない用例も、この中には2例含まれている。場所の解釈と連続性があると思われるからである。

Elle se.....passait les cheveux
彼女[Nom] REF[Dat] 通す df 髪[Acc]
au henné.

(=彼女はヘナで髪を染めた。)

(Vautrin, J., *Billy-ze-kick*, 1974)

23 フランス語では3項目の要素に所有形容が付いている場合には、自分の体に向う行為の叙述であっても非再帰構文になる。但し、例外的に再帰構文が用いられることもある。

Peut-être était-ce toute autre chose. Il la regardait maintenant dormir, et il
彼[Nom]

se.....passa les doigts sur sa
REF[Dat] 移す df 指[Acc] 上に 彼の/彼女の
bouche. Ses lèvres étaient toutes blessées.
口

(=それは全く別のものかもしれない。彼は今眠っている彼女を眺め、それから彼は自分の口に指を当てた。)(Aragon, L., *Les beaux quartiers* 1936)

この例文においてseが用いられているのは、話し手の視点が向けられているsa boucheが「彼の口」

を指示するの、「彼女の口」を指示するのかという解釈の曖昧性を取り除く為だと思われる。

24 行為の向う対象が「所有形容詞付き」の身体部位の場合については注23で触れたが、他に身体部位名詞(=B項)が属性を叙述する「修飾語を伴う」場合にも、自分の身体に向う行為の叙述であっても、非再帰構文が選択される。本論文では言語外事象と構文選択の関係をテーマの中心に据えている為詳しくは取り上げないが、これらの現象は話し手の視点と構文選択の問題を考える上で重要である。

25 武本(2002:109)は与格構文に置ける身体カテゴリを介した主体への関与性について次のような階層性を設けている。

状態変化> 動的接触> 静的接触> 接近> 注視

26 Herslund (1988) は、与格補語は「2次叙述」の主語であるという論を展開している。対格と与格の両方を補語としてとる文を、二重の叙述(predication)によって特徴付けることはめづらしくない。

27 ロシア語ではB項の被動作性が高くとも、動作主との関係においてそれが局部的である場合は、本稿で扱った再帰構文ではなく、再帰代名詞の与格を用いる。

ex. Он сломал себе.....ногу.
彼[Nom] 折る REF[Dat] 足[Acc]

(=彼は足の(骨を)折った。)

これと関連する現象は所有構文にも見られる。青木(2001)は、所有構文における所有者の被動作性の程度と格の関係、「対格」>「与格」を概ね支持しながらも、ロシア語では物理的变化を表す動詞は被動作性が高いにも関わらず与格を好む傾向があることを指摘している。

参考文献

- Academia Praha. 1979. *Русская грамматика*.
- 青木正博. 2000. 「譲渡不可能性の観点から見たロシア語の所有の与格の構文」『京都産業大学論集 外国語と外国文学系列』27 : 35-61.
- 青木正博. 2001. 「ロシア語の3つの所有構文の選択に影響を与える要因」『SLAVIANA』16 : 3-14.
- Большая Российская энциклопедия. 1997. *Русский Язык*.
- Enger, H.-O. & Nessel, T. 1999. The Value of Cognitive Grammar in Typological Studies: the Case of Norwegian and Russian Passive, Middle and Reflexive, *Nordic Journal of Linguistics* 22: 27-60.
- 藤村逸子. 1989. 「身体部位の所有者を示す与格補語について」『フランス語フランス文学研究』55 : 75-85.
- 藤村逸子. 1993. 「所有者と与格」『情報とコミュニケーション』名古屋大学特定研究シリーズ4 : 25-42.
- 藤村逸子, 内田充美. 2003. 「情報ファイル：オンラインデータベース—Frantext, Wordbanks Online, TLFi—」『フランス語学研究』37 : 87-93.
- Gerritsen, N. 1990. *Russian Reflexive Verbs - In Search of Unity in Diversity* - Rodopi.
- Kemmer, S. 1993. *The Middle Voice*, John Benjamins Publishing Company.
- Kemmer, S. 1994. Middle Voice, Transitivity, and the Elaboration of Events. *Voice: form and function*. John Benjamins Publishing Company. 179-230.
- König, E. & M. Haspelmath. 1998. Les constructions à possesseur externe dans les langues d'Europe. in J. Feuillet (eds) *Actance et Valence dans les Langues de l'Europe*. Monton de Gruyter. 525-606.
- Haspelmath, M. 1990. The Grammaticization of Passive Morphology. *Studies in Language* 14 : 25-72.
- 春木仁孝. 1993. 「代動名詞—受動的用法と中立的用法を中心に—」大橋保夫他編『フランス語とはどういう言語か』駿河台出版社. 212-218.
- Herslund, M. 1988. *Le datif en français*, Editions Peeters.
- Hopper, P. & S. Thompson. 1980. Transitivity in Grammar and Discourse. *Language* 56 : 251-299.
- 井口容子. 2001. 「中相範疇としてのフランス語代名動詞」、『言語文化研究』27 : 153-172 (広島大学総合科学部紀要V).
- Matthews, W.K. 1960. *Russian Historical Grammar*. London. University of London Athlone Press.
- 宮本正美. 1984. 「スペイン語における身体再帰代名詞の有無」『関西外国語大学研究論集』40 : 193-223.
- 中村芳久. 1999. 「ヴォイス・システム—態間関係の認知メカニズム—」『金沢大学文学部論集 言語・文学篇』19 : 39-65.
- 中村芳久. 2003. 「構文と認知—構文の連続性についての争点」『英語青年』148 : 672-675.
- 柴谷方良. 1997. 「言語の機能と構造の類型」『言語研究』112 : 1-32.
- 武本雅嗣. 1999. 「対格構文と与格構文について—慣習化された身体表現の共通性と多様性—」稲田俊明他編『言語研究の潮流』開拓社.
- 武本雅嗣. 2002. 「概念化と構文拡張—中心的与格構文から周辺の与格構文へ—」生越直樹編『対照言語学』東京大学出版. 99-122.
- 角田大作. 1991. 『世界の言語と日本語』くろしお出版.

Vendler, Z. 1967. Verbs and times. in *Linguistics in Philosophy*. Ithaca. N.Y. Cornell University Press 97-121.

ヴィノクーラ著、石田修一訳編. 1996. 『ロシア語の歴史』 吾妻書房.

APPENDIX I

- ・アンドレイ=ペールイ 『ペテルブルグ』
- ・アレクサンドル=ファージェエフ 『氾濫』、『若き親衛隊』 他
- ・アレクサンドル=クプリーン 『ルイブニコフ大尉』、『魔窟』 他
- ・アナトーリー=ルイバコフ 『短剣』、『青銅の鳥』 他
- ・アレクセイ=トルストイ 『苦悩の中を行く』、『アエリータ』 他
- ・アンドレイ=プラトーノフ 『チェヴェングール』、『ポトゥダニ川』
- ・アレクサンドル=グリーン 『深紅の帆』、『輝く世界』 他
- ・ボリス=ピリヤーク 『第三の首都』、『ザヴォロチエ』
- ・ボリス=パステルナーク 『特別保護証書』、『ドクトル・ジバゴ』 他
- ・ウラジミール=ナボコフ 『マーシェンカ』、『ロリータ』 他
- ・ベニアミン=カヴェーリン 『二人の船長』、『開かれた本』 他
- ・フセヴォロド=イワノフ 『装甲列車14-19』、『ボラヤ・アラピーヤ』 他
- ・ウラジミール=コレンコ 『束の間』、『ともし火』 他
- ・ダニール=グラニン 『捕虜』、『我等の大隊長』 他
- ・エヴゲーニイ=ザミャーチン 『われら』、『目』 他
- ・イワン=ブーニン 『アントーノフの林檎』、『アリエーニエフの生涯』 他
- ・イリヤ=エレンブルグ 『フレオ・フレニトの遍歴』、『雪どけ』
- ・イルフとベトロフ 『十二の椅子』、『黄金の子牛』 他
- ・イサーク=バーベリ 『騎兵隊』
- ・コンスタンチン=パウストフスキー 『白うさぎ』、『雪』 他
- ・コンスタンチン=シモーノフ 『生者と死者』、『兵士として生まれたるにあらず』 他
- ・レオニード=レオーノフ 『穴熊』
- ・レオニード=アンドレーエフ 『七人の死刑囚の話』、『血笑記』 他
- ・マクシム=ゴーリキー 『海燕の歌』、『母』 他
- ・ミハイール=ブルガーコフ 『巨匠とマルガリータ』、『犬の心臓』 他
- ・ミハイール=ショエロホフ 『静かなドン』、『開かれた処女地』 他
- ・ミハイール=ゾーシチェンコ 『回春』、『修道院』
- ・ミハイール=アルツイバーシエフ 『パーシャ・トゥマーノフ』、『サーニン』 他
- ・ニコライ=オストロフスキー 『鋼鉄はいかに鍛えられたか』、『嵐に生まれ出る者たち』
- ・ニコライ=グミリョフ 『ザラ皇女』
- ・オシップ=マンデリシターム 『時のざわめき』、『アルメニアの旅』
- ・フョードル=ソログレフ 『小悪魔』
- ・ユーリイ=オレーシャ 『羨望』、『三人のふとつちよ』